

## 書評

Kevin Meeker,

*Hume's Radical Scepticism and the Fate of Naturalized Epistemology*,  
Palgrave Macmillan, 2013, xiii+196 pp.

渡辺一弘

「誰々は本当に何々主義者だったか」式の問いは、哲学・思想史研究における問題設定における、ひとつの紋切り型といって差し支えないだろう。「ヒュームは懐疑主義者だったか」と問うてもそこにはもはや新鮮な響きがない。紋切り型はしばしば、われわれの知的営為を退屈なものにしてしまいがちだ。しかし、それさえもつねに真ではないことを思い知らせてくれるのが、本書だ。

著者は、「ヒュームは懐疑主義者か」というこれまで幾度となく繰り返されてきた問いに真正面から取り組み、はっきりイエスと答える。この答えは教科書的なヒューム理解と合致するわけだが、著者の解釈は古典的ヒューム像のたんなる追認ではない。20世紀以降のヒューム研究において勢力を増し続けてきたのは、ヒュームの哲学、なかでもその知性論を「自然主義」と特徴づける解釈であった。そして多くの人々が、そのような自然主義解釈こそ、かつてビーティやリードら同時代人から論難されたヒュームの哲学を、懐疑論という「汚名」から救い出すことになるのだと考えてきた。しかし、と著者は問う。そもそもなぜ懐疑論を「汚名」と考えなければならないのか。それはけっしてひとつの真面目な哲学的立場となりえないのだろうか。ヒュームの著作、とりわけ『人間本性論』には、濃厚な懐疑的要素がはっきりと見てとれる。その懐疑的色彩を消さずに、しかし哲学的に擁護可能なかたちでそれらを読むことはできないのだろうか。「ヒュームの過激な懐疑論と自然化された認識論の運命」と題された本書は、いわゆる「ヒュームの自然主義」を認めたうえでなお、懐疑論者としてのヒュームを蘇らせようという野心作なのである。

著者は現在、米国・南アラバマ大学哲学科の教授。ヒューム研究を中心に現代認識論、宗教哲学を専門としている。本書においても、ヒュームのテキストに忠実であろうという態度を堅持しつつ、そこで論じられている諸問題の性格を掴むために有益となる限りで、現代認識論および心理学の議論と知見が積極的に用いられている。

さてまずは、本書で展開される解釈の基本テーゼを確認しておこう。著者は、懐疑論の帰結を受けてヒュームが採った立場を「認識的無差別主義 (Epistemic Egalitarianism)」と特徴づける。この立場によれば、われわれ人間の信念はどれも、それと対立する内容をもつ

信念に比べて「より正当化されている (justified)」とか「より合理的である (rational)」とかいえるような認識的地位を持っていない。つまり、われわれが他にもないある特定の信念を選ぼうとするとき、認識的な確実性や合理性や正当化の度合いなどの点においては、どれも「等価」であり「平等」である。それゆえ認識的「長所」という観点からは、どの信念にも「あちらよりこちらを選ぶべき」と教えてくれるような差はない。これはまぎれもなく懐疑的主張である。ただしここで重要なのは、この立場がピュロンの懐疑主義を含意しないという点だ。すなわち、認識的無差別主義はあらゆる信念の棄却を要求するわけではない。この点を明確にすることで、著者は、ヒュームを反懐疑主義的な自然主義者と見なす解釈には抗しつつ、かといって古典的な懐疑主義解釈にも回帰することなく、十分に理解可能な「自然主義者であり懐疑論者でもあるヒューム」像を打ち出すのである。

以上のような著者の解釈上の基本戦略を、これまでのヒューム研究史を手短に振り返りつつ述べたものが、ちょうど本書の1章の内容にあたる。続く2章と3章で検討されるのは、『人間本性論』第1巻第4部第1節に登場する「理性に関する懐疑論」である。ヒューム自身が「全面的懐疑論 (total scepticism)」と呼ぶように、そこで提示されるのは、疑いの対象範囲のひろさという点でも、その帰結がわれわれに突きつけてくる要求の深刻さという点でも、度し難く過激な懐疑論である。そして著者もここに、最も強力かつ顕著なかたちで表現された、ヒュームの懐疑的主張を見てとる。換言すれば、著者は「理性に関する懐疑論」を、認識的無差別主義にもとづいた懐疑主義者という、自身のヒューム解釈のモデルケースとして捉えるのである。このように簡単に書くと、懐疑主義解釈をとる著者がヒュームの哲学の中で最も「過激」とされる懐疑論に注目するのは当然に過ぎて、とくに面白みのない試みと受けとられてしまうかもしれない。しかし、著者が取り組む「ヒュームは懐疑主義者か」という問題の背景に存するこれまでの研究の蓄積とその傾向に正当な関心を払うならば、そうした印象は適切でないことがわかるだろう。というのも、かねてよりヒュームの懐疑論として注目されてきたのは因果論や感覚能力に関する懐疑論であり、『人間本性論』の中でも非常に短い紙数しか割かれていない「理性に関する懐疑論」が詳細に検討されるようになったのは、ロバート・フォグリンによる研究 (Fogelin, 1985) を始めとして、比較的近年のことだからである (なお、日本においては久米暁 (2005) がフォグリンの論点を批判的に受け継いで以降、徐々にではあるが、この点について議論の深化が試みられている)。

さて、本書の内容に戻って2章では、この「理性に関する懐疑論」がわれわれを破壊的な帰結へと導くひとつめのステップ、すなわち、いかなる論証的知識も蓋然的信念へと「劣化」せざるをえない、というヒュームの議論が検討される。ここで論証的知識とは、観念

どうしの比較から生じ、あらゆる不確実性を免れているものであり、ヒュームも、論証的学問において規則そのものは確実かつ不可謬なものであるという想定からスタートする。しかし、われわれがそうした規則を適用する際には誤りの可能性を免れえず、結局、例えば単純な計算結果などに関しても、われわれは自分の信念に対して何がしかの疑いを抱かざるをえない。著者は、われわれが自らの「可謬性 (fallibility)」に気づくことで懐疑を深めていく、というこの議論のモチーフに着目し、これを解釈の支柱のひとつとしていく。

そして3章では、理性に関する懐疑論のもうひとつのステップ、すなわちあらゆる蓋然的知識が結局は無に帰し、「信念と明証性のまったき消滅」に至らざるをえないという議論が検討される。著者にとって、そのような「可謬性が認識に対してもつ究極の帰結」は、認識的無差別主義へとつながる主張として捉えられるべきものである。それに対して、懐疑主義者としてのヒューム解釈を採らない人々は、この懐疑論を一種の帰謬法 (reductio) と見なそうとする。すなわち、この懐疑論がわれわれにとって受入れ難い帰結を持つことを示すことによって、ヒュームは、その議論を支える想定や枠組み (典型的には、ある種の合理主義とされる) が誤りであることを指摘しようとしたのだ、と。しかし著者は、このいっけん有望そうに見える方針も、自然主義解釈の支持者たちの目的には何ら寄与するところがない、と論じている。

さらに4章において議論は次のように展開していく。「理性に関する懐疑論」から見てとれるヒュームの認識的無差別主義は、たんにその懐疑論だけに関わるものではなく、『人間本性論』のその他の箇所における議論をもよりよく理解可能なものとしてくれる、と。このことを示すために、著者はまずヒュームの信念論を概観し、さらに『人間本性論』第1巻 (知性論) の結論部を吟味することを通してヒュームの信念論と懐疑論との関係を検討する。そこで議論の焦点となるのは、ドン・ギャレットが「資格原理 (title principle)」と呼ぶヒュームの言明である (Garrett, 1997)。ヒュームは懐疑的性格に満ちた知性論結論部のさらに最後になって、「理性が生き生きとしてある種の傾向性と混合しているときには、それに同意されるべき (ought to) である」という、理性の適正利用に関する規範的言明のよ<sup>うな</sup>ものを持ち出してくる。しかし著者は、この資格原理は懐疑論を退けるような認識的な (真偽の決定に関わる) 原理ではありえず、プラグマティックな原理であると解すべきことを、テキスト上の前後関係と概念的な考察から示そうと試みている。

ところで、著者のこのようなヒューム解釈は、おもに『人間本性論』の読解としてなされ、したがって文献的証拠も多くは同書から採られている。しかし5章において著者は、ヒュームによる後の著作『人間知性研究』もまた同様に、過激な懐疑主義的性格を持った論考として (すなわち、そこにおいてもヒュームは認識的無差別主義をとっているものと

して) 読むことができる、と主張する。これは本書全体の目論みに照らせば補足的な議論と思われるかもしれないが、実際にはかなりチャレンジングな課題に取り組んでいる。というのも、ヒュームは『人間知性研究』において、『人間本性論』で提示した議論のうち「理性に関する懐疑論」も含めて多くの部分を修正ないし割愛しており、それゆえそこに見出される懐疑主義的傾向も、相当に弱まったものとするのが通例だからである。これに対して著者は両書の間に指摘されるギャップを少しずつ埋めながら、さらに『自然宗教に関する対話』の解釈も交えることで、過激な懐疑主義は『人間本性論』だけでなくやはりヒュームの哲学全体を特徴づけていると主張する。

ここまでの章において著者は、もっぱらヒュームのテキストに沿って自身の解釈を展開してきた。以降の6~8章では、そうした解釈がよりひろい観点から、関連する哲学的問題とともに検討される。6章と7章で扱われるのは、自然主義解釈を念頭においた次のような問いである。すなわち、ヒュームの哲学には自然主義的と呼びうる主張が含まれているか、含まれているとして、それは本当に懐疑論からの脱却を可能にするようなタイプの自然主義なのか。6章ではこの問題がやや一般的なかたちで論じられている。物質主義 (materialism) ・物理主義 (physicalism) ・自然主義 (naturalism) の三つ組をめぐる概念的整理を通じて、著者は、自然主義と懐疑主義が両立不可能であるという (自然主義解釈の論者たちがしばしば暗黙のうちに置く) 前提に疑問を呈する。そして、「可謬主義 (fallibilism)」と「科学を認識におけるひとつの指針とみなすこと」を明らかに奉じているという点において、ヒュームはたしかに自然化された認識論と呼びうるものを支持していたが、しかしそれはヒュームを懐疑論から救うようなものではない。むしろ著者によれば、ヒュームの自然主義すなわち人間本性の学は、彼が認識的無差別主義へと至るのを促すようなものなのだ。

次の7章では、ヒュームと自然主義の問題がさらに具体的なかたちで検討される。ここで著者が立てるのは、ヒュームの認識論は内在主義的かそれとも外在主義的か、という問いだ。自然主義解釈には、これまで「正当化に関する外在主義者としてのヒューム」像がしばしば結びつけられてきた。これに対して著者は、ヒュームの諸議論に抜き難く含まれる内在主義的要素を指摘することで、自然主義解釈を支えるひとつの説得材料を突き崩そうとする。より正確に言えば、著者が攻撃するのはヒュームを徹底的な外在主義者、すなわち「ある信念が正当化されるか否かは、もっぱらその信念の保持者に外在的な状態によって決まる」と主張する者とする解釈である。これに対して著者自身は、ヒュームが支持するのは部分的な内在主義、すなわち「ある信念が正当化されるか否かは、少なくとも部分的にはその信念の保持者にとって内在的な状態によって決まる」とであると解釈する。

最後の8章では、ヒュームが認識的無差別主義を採ったのであれば、情念論や道徳論における彼の主張の意義をわれわれはどう理解したらよいか、という問題が論じられる。ヒュームに着せられた「懐疑主義」という汚名を雪がねばならぬ、と考える解釈者たちは、懐疑主義そのものがひとつの哲学的立場として成り立ちえず、したがってそのような立場をヒュームに帰せば彼の哲学を全くナンセンスなものとしてしまう、と信じている。これに対して著者は次のように反論する。第一に、たしかにヒュームは「明らかに」「確かに」といった言い回しを使っており、これは認識的無差別主義と矛盾するかのように見える。しかしこうした言い回しが言葉の綾に過ぎないことは、ヒューム自身が知性論の末尾で断っている。第二に、たとえ認識的正当化を欠いていても、自分にとって正しいように思える信念を「擁護」することまで止めなければならない理由はないはずだ。むしろ、認識的な正当化を欠いたいくつかの想定を基に議論を展開することは、われわれが日常的におこなっていることである。さらに著者は、認識的無差別主義にもかかわらずヒュームをさらなる探求へと向かわせる「原因」についても説明を加える。その原因とはまず、ある信念がそれと対立する信念より「自然で快い感情」をわれわれにもたらすという事実であり、さらにより抽象的な探求においては、われわれが「ある特定の瞬間における眺め方に応じて」「特定の点で」断定的になる傾向性を持つ（換言すれば、断定的な「気持ち」になる）という事実が、そうした学問的探求の継続を動機づける。こうした非認識的ないしプラグマティックな原因への注目は、近年他にも少なくない論者らが試みている。しかしこの点において、著者の論述に多少の不満を感じざるを得ない。例えば、ヒュームは知性論結論部で「仮説がもっともらしい見かけや快いという理由だけで受け入れられれば、われわれは日常の行為や経験に適するようなどんな不動の原理もどんな意見も、持つことができないうであろう」とも述べてもいる。これはヒュームにとっての探求の原因を「自然で快い」感情に求めるとき、問題となろう。また、『人間本性論』全三巻は、たんなる個別적인見解の羅列ではなく、相当な体系性を有している。すなわち自らの探求結果に対する俯瞰的な視点からの反省が含まれている。こうした視点が「特定の瞬間における眺め方に応じて断定的になる傾向性」からどのように説明可能なのか、疑問が残る。

## 文献

Fogelin, R. J. (1985). *Hume's Scepticism in the Treatise of Human Nature*, London: Routledge and Kegan Paul.

Garrett, D. (1997). *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.

久米暁 (2005). 『ヒュームの懐疑論』, 岩波書店.

[日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学)・哲学]